あぜみち

◆山は青空

林業は厳しいと言われ続けて久しい。阪神淡路大震災以後従来型の日本建築に対する不信感、ＰＬ法等による建築基準の厳格化から規格品の揃い易い外材への移行、そして不況による新築戸数の減少で素材単価は三年で半値まで下がった。森林所有者の山への関心はどんどん薄れ、若い所有者の中には、無用の物、あるいは余計なお荷物と考える者まで出る始末である。

しかし、京都議定書に代表される環境問題への関心の高まりから、山への注目が官民から起こってきた。国は林業版デカップリング、高知県は環境税導入、梼原町は間伐助成金を決めた。その事により、通年の二倍のペースで間伐が進む事となった。

「ゆうりん」は、林業技術の継承と林業をよりメジャーな職業にする事を目的に組織され、間伐を主とした事業を行っている。組合員は未経験者の受け入れで増員してきた。年一名程度のペースだったのが一昨年の秋に四人のＩターン者が入ってきた。経歴は多様であるが、とにかく山での生活と仕事を望んだ者たちである。

新人は一年間の研修生のうちに基礎技術の習得と林家や行政との在り方等を学び、その後本人と組合員の意向が合えば正組合員となる。この期間は当組合にとって経営的には厳しいが、新しい風と感覚を得られる時でもある。実際に一人前になるには三年かかるが、林業従事者の高齢激減の中で貴重な存在である。

今、国産材のシェアは一七％、日本建築の割合が一五％。日本建築工務店の組織化、新商品の開発で販売力の強化を計っていただくとともに、生産側も外材に負けない規格化とロットの拡充に努めなければならない。現在の人工林の主体はまだ青年期で手が掛かる。環境面での必要性と同時に進める事で循環型環境林業が成り立つ。

山は所有者の物であると同時に国民全体の財産として、元気な山を創り続けたい。

（高知県梼原町　矢野博正

梼原林産企業組合「ゆうりん」代表）

◆三五才で一四年ほど勤めていたＪＡ都城

を退職し、高齢の両親から八〇頭程の肥育牛を引継いだ。妻は保育士の仕事を継続した。八〇頭規模では生活ができないので平成一四年に一二〇頭収容の牛舎と一八〇坪の堆肥舎を建てた。資金の余裕もないので素牛はできるだけ価格の安い牛を導入することとした。価格の安い牛とは、競り市時点での発育が悪いため体重が少なく、血統・体型がよくない子牛である。このような子牛を導入して利益を上げるためには、競り市時点での体重が過肥なものは避け、肉付きは良くなくても骨格のしっかりしたもの、血統は優秀でなくても組合わせのしっかりしたもの、体型が悪くても種牡牛で特徴がありそれを引継いでいるものを選ぶようにした。また、子牛の競り市は参加するお客の層によりかなり価格が変動するので、どのような牛が買い得か、種牡牛、体重、性別など総合的に判断している。飼養管理については、育成期と肥育期に分け、育成期は六～八頭の群飼であるが、両側に飼槽を取り付けるなど「くず牛」の出ないように工夫している。肥育期に当る導入後五カ月～出荷（二一〇カ月以上）までは一～二頭飼いとして個体管理の徹底を図り、発育、肉質のバラツキのでないようにしている。この期間は自動給餌機により一日四回給与している。このような導入、管理の方法で平成二年に二〇〇頭、平成五年に三二〇頭、平成九年に四五〇頭規模になり、私とパート二人の計三人で飼養管理している。

一五年の間にはバブル経済の発生、崩壊、Ｏ一五七による集団食中毒、九〇年振りの口蹄疫の発生、ＢＳＥの発生など様々な事を経験した。二一世紀に入り温暖化など様々な異変が地球に起きている。牧草の輸入国であるオーストラリアは大旱魃である。肥育農家の脅威は輸入自由化や伝染病の発生だった。地球環境の変化により外国から穀物が入らない事態がくるかもしれない。その時は日本の畜産は壊滅である。その日が来ないことを祈っている。

（宮崎県三股町　馬渡芳文　畜産業）